

葉靈鳳作品におけるフロイト理論運用の変遷

石井洋美

1. はじめに

創造社の徒弟と言われた葉靈鳳は、中国で初めて精神分析による創作手法を打ち立てた作家を自称したという。

精神分析はオーストリアの精神科医ジークムント・フロイトによって19世紀末から20世紀初めにかけて形成された学問である。もともとは神経症に対する新しい治療方法導入の試みという臨床医学から生まれた。精神分析は潜在意識（無意識）の存在を理論の前提とする。潜在意識の存在は日常の錯誤行為、夢、神経症の症状となって現れることから確認できるのだが、フロイトは潜在意識の中に押し込められたものを思い出させることによって、人の心の病を治療し、更には人の心の仕組みや働きを解明しようとした。¹⁾

中国では、錢智修が1913年に「夢之研究」の中でフロイトと夢について簡単に言及しているが、1921年に朱光潜が「福魯德的隱意識説与心理分析」を発表してから、フロイトの潜在意識と文芸との関係が注目され始めた。そして20年代には多くの新文学家が精神分析を運用して創作を行おうとしたのだが、その運用はまだまだ皮相的で、何れも自虐的なコンプレックス、抑圧からの解放、異常な性心理といった精神分析の主な項目を借用して人物の内面を描写しようとしたために、心理分析のモデル化現象が生じた²⁾と言われる。

ロマン主義の傾向を濃厚に持つ創造社に属し、ピアズリーやオスカー・ワイルドの唯美主義に傾倒した葉靈鳳の前期作品³⁾にも、そのモデル化の傾向が明らかに見られる。しかし同時に、葉靈鳳の作品を書かれた順に従って見ていくと、作品への精神分析の運用の重点が変化していることに気づく。

本稿では、フロイト理論を運用して書いたと言われる葉靈鳳の前期作品数編

を取り上げて⁴⁾、葉靈鳳の精神分析受容の背景にあるもの、特に1920年代の創造社における精神分析の受容に結びつけながら、作品へのフロイト理論の運用がどのように変化していったのかを見ていきたい。

2. 葉靈鳳によるフロイト理論受容の背景

葉靈鳳によるフロイト理論の運用に影響を与えた時期的、環境的背景として、以下の点に注意したい。

一点目は、人物の心理の変化を描くことに対する作家たちの注目である。精神分析以前に中国に入り、20世紀初頭に広まった西洋心理学の影響を受けて、新文学家は人物の心理を描写することに強い関心を抱いていた。そこへ精神分析学の潜在意識という概念が提示されたことで、五四作家は「人の精神世界の中に、まだ認識されていない潜在意識の王国が存在していることを、驚きをもって発見」⁵⁾し、登場人物の潜在意識の発掘に夢中になった⁶⁾と言われる。

二点目はフロイト理論と反封建との結びつきである。フロイトは道徳心と衝突する嫌悪すべき考えを抑圧して、潜在意識の中に封じ込めたために、神経症を発した女性の症例を挙げている⁷⁾が、反封建の側面を持つ五四運動を経た中国において、それは封建道徳による人間性の抑圧に結びついた。特にフロイト理論は潜在意識の中に抑圧された欲動⁸⁾の根源は性的なものであると考えるため大いに注目され、封建的性道徳への攻撃の形をとって作品中に表れた。

三点目は葉靈鳳が属した創造社の性格である。1921年に結成された創造社は芸術のための芸術を主張し、人生派である文学研究会に対して芸術派と見なされるが、たとえ彼らであっても、社会に束縛されず、自由に創作を行うことはできなかった。鄭伯奇は、創造社同人に芸術至上主義者は一人もおらず、「そのロマン主義は、終始反抗の精神と破壊の情緒に富んでいた」⁹⁾と述べている。そして郭沫若らが著したフロイト主義を紹介する論著とフロイト主義を応用した評論は、創造社同人に大きな影響を与え、郁達夫が「沈淪」において「青年の憂鬱病 Hypochondria の解剖」、「性的欲求と魂と肉体の衝突」という「現代人の苦悶」¹⁰⁾を描いたように、彼らは「異常な」性心理を描くことになる。

愛書家であった若い葉靈鳳が西洋文学の新思潮から多大な影響を受け、恋愛心理、性愛心理を描くことに強い関心を抱いたとしても不思議ではない。いち早く受容したフロイト理論の初期作品への運用に、反封建の傾向や創造社諸氏—郭沫若の論著や郁達夫の小説—からの影響が見られるのは寧ろ当然のことであろう。

3. 葉靈鳳作品におけるフロイト理論の運用

3.1 「女禍氏之遺孽」（1925.3.4作）—封建的性道德に対する反抗モデル

郭沫若の『西廂記 芸術上の批判与其作者的性格』は王実甫の『西廂記』をフロイト理論を用いて解釈した評論である。彼は、『西廂記』は個体の性欲がその人の道徳性或いはその他外界との関係によって抑圧されて生じた「心の傷（リビドー¹¹⁾」が生み出したものであるとし、その「心の傷」の原因を人間の本性を歪める礼教に見出し、『西廂記』はそれに対する反抗精神、革命によって創造された芸術であり、そこに描かれているのは人間性にかんたった行為であると主張している。¹²⁾ こうした論調が、葉靈鳳の初期作品におけるフロイト理論の運用に、少なからぬ影響を与えたと考えられるのではないだろうか。

さて、「女禍氏之遺孽」のプロットは以下のようなものである。

主人公の蕙は結婚7年になる夫と二人で暮らす主婦だが、階下に住む家族の息子で上海の大学に通う苺箴と不倫関係にある。苺箴が蕙への手紙をしまい忘れたことから二人の関係が苺箴の家族に知られ、二人は引き離され、蕙は精神的に追い詰められていく。夫は蕙の不倫を知った後も彼女を責めないと言うが、やがて蕙は苺箴の子供を産む。軍閥内戦を避けて子供を連れて上海へ逃れた蕙は苺箴と再会するが、苺箴は夫を大切にしようと別れの手紙をよこす。

この作品はフロイト理論を用いて主人公の多重人格を描き、封建道徳に対する強烈な反抗を表現したものであるとされ、その点が評価されてきた。一つの人格は礼教に縛られたあるべき私であり、もう一つは人間の自然な性愛の願望を成就したい私である。この二つを対立的に捉え、時に湧き上がる欲動の勢いに任せて礼教に激しく抵抗する主人公の言葉に、社会性を、社会批判力を見、

そこに作品の価値が見出されてきた。しかし、葉靈鳳は礼教を批判するためにこの作品を書いたとは思われない。葉靈鳳がこの作品で行おうとしたのは、主人公の揺れ動く心理をフロイト理論の心の三層構造を典型的に使用して書くことであり、描こうとしたのは、二つの人格の間で苦悶する自我そのものだったのではないだろうか。

フロイトは心の構造を自我、超自我、エスの三層から成ると考える。自我は私が「これが私だ」と思っているもので、心の主体である。超自我は自我の内部にある自我にとっての理想であり、自我を監視し、自我を罰する。エスは潜在意識の中であってあらゆる欲動を含むものであり、ひたすら欲動を満足させようとする。これら三層は互いに影響し合う。自我は非常に不安定で、常に外界、超自我、エスの脅威にさらされている。外界に適応するために外界からの要求に応じようとし、超自我の叱咤に従って理想的な私であろうとし、快感原則に従って突っ走ろうとするエスを制御しなければならない。¹³⁾ この心の三層のせめぎ合いを表現したものが、「女禍氏之遺孽」であろうと考えられる。

この作品において、葉靈鳳は確かに、主人公蕙の超自我の中核に礼教を置いている。長い歴史と伝統が作り上げた、夫にとって妻はこうあるべき、女性とはこうあるべきという観念が彼女の自我を叱咤し、彼女の過ちを責める。

中年の夫のある女性として、きちんと家事を切り盛りできないだけで恥ずかしく思うのに、思いがけないちょっとした遊び心から、苺箴に夢中になってしまった。^{p232}

彼女の自我は欲動に従って恋愛に走ることを求めながら、大学生の恋人の人生を狂わせている自分の罪深さに怯え、エスと超自我の間で翻弄される。

ああ、本当に罪深い。今、彼とこうしたいきさつを持ったことを少しも後悔はしないけれど、私は結局彼を傷つけ、結局彼に背いてしまった。^{p233}
そして自らの心身を責め苛んだ後、開き直ったように礼教の束縛を攻撃する。

礼教の言う貞操とCupidの矢に射抜かれた恋愛に一体どんな関係があるというのだろう。^{p239}

中国の研究者は蕙の愛欲を数千年に及ぶ極めて安定した封建思想体系（集団

無意識)が形成したコンプレックスの排泄であると捉え、封建主義に対する強烈な反抗という社会的意義と人道主義的内容を併せ持つ佳作である¹⁴⁾と評価する。また一方では鄭伯奇の言葉を引用して葉靈鳳作品の特徴を述べ、フロイト理論が葉靈鳳の「浴」や「曇華庵の春風」等の作品において、主人公の墮落を許容する根拠になっている¹⁵⁾と批判する。鄭伯奇は葉靈鳳の心理描写を白采¹⁶⁾のそれと比較して、「葉靈鳳が注意しているのは物語の経過であり、それらの特殊な事実の叙述には頗る誘惑の効果がある」¹⁷⁾と述べ、葉靈鳳の作品には主人公の変態的な性格を描き上げた白采のような深みはないが、白采の小説より面白みがあるとしている。この本来はプラスの面を持つ評価は否定的に解釈され、性的挑発が強く、社会性、社会批判力が弱いと思われる作品を批判する時に用いられる傾向があるようだ。¹⁸⁾しかし、やはり「女禍氏之遺孽」が読者を引きつけたのは、その「物語の経過」の描写のためであり、葉靈鳳が描こうとしたものは紆余曲折する主人公の心情そのものであり、それがこの作品の秀でた点なのではないだろうか。抑圧からの解放を封建道徳に対する反抗に結びつけたこの作品は、この時期のフロイト主義文学の一つのモデルを示しているのではないだろうか。作品に社会性を見出してそれを評価する、それは文壇の隅に押しやられていた作家を再評価しようとした時から続いている、彼らの作品の中にリアリズムや「人生のため」を見出そうとする一つの評価の傾向と言えるのではないだろうか。

3.2 「姉嫁之夜」(1925.4.30作) —フロイト夢理論の図解モデル

フロイトは、不安や強迫観念といった精神病質的な産物が正常な意識と異なるように、夢も覚醒時の意識とは異なるものである点、精神病質的な観念が潜在意識から生じるように、夢も潜在意識から生じるものである点に注目し¹⁹⁾、1900年に『夢解釈』を出版した。「夢の解釈は、心の生活の無意識を知るための王道である」²⁰⁾とするフロイトの夢理論は、人物の心理を掘り起こす新たな方法を提示し、「文章中に夢を挿入する手法は、作家の常套手段になった」。²¹⁾

フロイトは夢を単なる身体的刺激の所産であるとする従来の説に反論し、夢

は心的行為として独自の価値を有し、その動機は幼児期に由来する願望の充足であり、「夢のきっかけとなるほやほやの諸体験」²²⁾が夢の内容の最も手近な材料になると考える。

しかし郭沫若は「批評与夢」の中で、夢の生成原因には精神分析学派の言うものばかりではなく、感覚器が刺激されて生じた錯覚や、脳神経中枢が刺激されて生じた記憶の総合もある²³⁾とした上で、作家が文章中に夢を挿入するに当たって留意すべきことについて、次のように述べている。

作品中に夢を挿入する手法は作家がよく使うものである。作家が書く夢が純然たる事実の記述であれば、前後は必ず符合して、読者が厳密に分析しても破綻は見つからない。作家が書く夢が虚構であれば、夢の前に綿密な意図が配置されていないと、忽ち馬脚を露わす、言い換えれば不自然になる。夢の前の配置とはどういう意味か。つまり夢によって経験する現象または夢の潜在内容が、みな夢に入る前に準備されていること、生理的、心理的材料が一つ一つ割り当てられていて、しかも夢の中心を成す意識ががちりとつかまれていることである。²⁴⁾

さて、葉靈鳳は創造社の中でも作品中に夢や白日夢を描くことを殊のほか好んだ作家であると言われる。「姉嫁之夜」は、姉の婚礼の日の夜、精神的には疲労困憊しているのに心がざわざわしてなかなか寝つけなかった主人公舜華が、無理やり目を閉じて眠ろうとし、夢を見る物語である。夢の中で舜華と姉は恋愛関係にあり、たとえ他の男性と婚約したとしても二人の関係は変わらないと約束するが、姉は舜華を裏切ってその男性と結婚する。花嫁姿の姉を眺めながら、心の中で愛情を踏みにじった姉に恨みの言葉をぶつけ、姉と新郎をホテルまで追いかけて新郎に掴みかかったところで隣に寝ていた叔父に起こされ、夢は終わる。この作品は何を表現しようとしているのか、先行研究では以下のように解釈されてきた。

作者は主人公の夢を描くことで、姉の結婚によって彼の性的欲望がかき消されたことによる苦痛とあがきを表現している。この作品は母親に対する愛情を母親に最も似ている姉に転嫁した一種のエディプス・コンプレッ

クスを姉弟の乱倫関係の描写を通じて表現しようとしたものである。²⁵⁾

筆者には、「姉嫁之夜」は、葉靈鳳がフロイト夢理論の主な項目を如何に取り込んで書くかを試した作品であり、同時にフロイトの夢理論を運用して虚構の夢を書くために、郭沫若が「批評与夢」において指摘したような「夢の前の配置」に注意して書いた作品であるように思われる。

姉の婚礼で、舜華は新婦と華やかさを競うように色とりどりに着飾った姉の同級生たちと同席する。

この万物がみな萌え出す春に、目の前の若い女性に相対し、彼女たちが陶然として頬を染め、その真っ赤な唇をグラスに近づける時の筋肉の震えを見ていると、もう思わず苦しくなる。これは明らかに誘惑だ。逃れ難い力を帯びた誘惑だ。^{p106}

これがフロイトの言う「日中残渣」である。この夢によって舜華が充たそうとした願望とは何か。舜華の心の秘密を解き明かすキーワードは「赤い唇」である。舜華は心の中で「あなたのこの赤い唇、僕に吸わせたことのある赤い唇を、僕はどうしてもあなたに踏みじらせることはできない！これは僕のものだ！」^{p110}、「彼と結婚したいのなら、あなたの唇を切り取って僕に与えるべきだ！」^{p110}と叫ぶ。嫉妬の炎を抑えようとして「彼は唇をきつく噛んで耐えたが、唇は既に噛み切られて一筋の裂傷ができていた」^{p111}等。これらの唇に対する異常なまでの執着を示す描写から、舜華は何か唇と結びついたトラウマを持っていることが想像される。或いはそれは姉に対する充たされなかった幼時性欲であるかも知れない。しかし、彼が現在も姉に対して性的欲望を持っているとは限らない。姉に対するエディプス・コンプレックスは21歳という年齢になるまでに解消され、姉の挙式で同席した女性たちの唇の誘惑によって想起されたに過ぎないのかも知れない。気持ちが落ち着かず眠れないのは「実は彼の心の中にある無形のものが災いしているからである。こうした状態は三年前のある夜に彼が経験したことの正に繰り返しである—その夜は兄の結婚の夕べであった。」^{p105}こうした叙述は、現在の舜華の興味の対象はあくまでも「赤い唇」の若い女性たちであり、彼女たちへの関心と結婚ということから想像される男女

の性的な関係が現在の若い舜華の心に刺激を与えて、こうした夢になって現れた可能性を仄めかすものなのではないだろうか。フロイトは「夢を作り出す願望はたとい現在の願望であっても、遠い幼時の思い出から強力な援護を受けている」²⁶⁾と言う。遠い過去と現在を結びつけているのが「赤い唇」の記憶ということなのではないだろうか。フロイトは夢を見た者がこういう夢を見たと報告する内容を夢の顕在内容、分析を経て初めてはっきりする隠された意味を夢の潜在内容と呼ぶ。²⁷⁾ 舜華の夢は姉に対する乱倫の欲望を表現したものだとする解釈はとても分かり易い。それは舜華の夢の顕在内容そのものである。それが葉靈鳳の表現したかったものであるならば、この作品における夢理論の運用はまだまだ皮相的であると言わざるを得ないのではないだろうか。

次に「夢の前の配置」についてだが、葉靈鳳は上記の「日中残渣」以外に、舜華が感覚的・心的刺激を感じていることを述べている。彼は作品の冒頭から季節が春であることを繰り返して述べる。「人を悩ますうららかな春日和」^{p105}、「憎らしい春、空気中に麻醉薬をまき散らしたように、人を何かと朦朧とした気分させる」^{p107}等。舜華の心は春の陽気に影響されて穏やかではない。舜華は宿泊する親戚のために自分の部屋をあげ渡し、空き部屋になっている隣家を借りて父の従弟と二人で泊っている。普段と異なる環境が舜華に居心地の悪さを感じさせる。「同じ寝台に眠る叔父のぐうぐうという鼾と、黒く汚れた両足の足裏から蒸発してくる臭いが彼を更に落ち着かなくさせ、寝返りを打たせた」。^{p105} 「男女が部屋を同じくすることは、人の道として最も重要なことである」^{p108}という叔父の寝言。眠れない舜華は、姉は今頃どうしているだろうと想像し、そこから「結婚の舞台裏に横たわる秘密」^{p108}に思い及ぶ。このように、葉靈鳳はこの作品において、郭沫若の言う虚構の夢を書くための準備を周到に行うこと、舜華がこうした夢を見るための条件を整えることに、注意を払っていると思われる。

3.3 「明天」(1928.2作) —心理分析への集中

主人公麗冰の誕生日の夜、同居する叔父が欲望に駆られて彼女の部屋にやっ

てくる。激しく抵抗する内に叔父は我に返り、彼女は事なきを得る。全てを酒酔いのせいにして叔父を部屋に送り届けた後、麗冰は日記をつける。

「明天」は、「葉靈鳳の多くの小説は、常にリビドーの凱歌の中で、全ての合理的な或いは非合理的な道徳の拘束を否定し、小説の中で何の意味もない性の排泄を行う。」²⁸⁾ という批評とともに例示される小説であるが、そうなのだろうか。叔父が甥の妻に暴行を働こうとするストーリーは、現在の常識から言っても肯定されるものではないだろう。しかし、麗冰は叔父を責めない。

人間とは本当に最も役に立たないものだ。自制の力など少しもありはしない。自分に打ち勝つ力など少しもありはしない、(中略—筆者) 飢えに抗する力を持ち得る者は一人もおらず、寒暑に抗する力を持ち得る者は一人もおらず、自分の内心の避けがたい欲求を拒む力を持ち得る者は一人もいない。^{p81}

麗冰の日記の言葉から、葉靈鳳がこの叔父の持つ一人の人間としての弱さに理解と同情を示していることがわかる。麗冰は叔父が礼教の教育を受けた人物であることにも言及する。

深い学識や礼教の尊厳など、抗し得ない魔力に襲われた時には、ほんの僅かな効力も発揮できたためしがない。^{p81}

しかし、葉靈鳳は既に声高に礼教を批判することはせず、叔父を礼教の犠牲者のように描いてもいない。「女禍氏之遺孽」のようにフロイト理論を反礼教の道具とするわけでもなく、「姉嫁之夜」のように夢理論の主な項目を運用することや、夢を書くための準備に傾注するわけでもなく、主人公の心理の掘り起こしそのものに集中している。葉靈鳳は彼女に客観的に冷静に日記を書かせることによって、彼女を分析者であると同時に分析される者とした。フロイトは患者にトラウマとなっている出来事を思い出させるために自由連想法を用いた。自由連想法とは、患者に静かな自己観察の状態に身を置くよう指示し、感情、考え、回想を浮かんできたままの順番で、取捨選択をせず、自分が気づいた事に一切の批判を加えずに報告させるというものである。²⁹⁾ 麗冰はこの自由連想法を用いて、自分を対象とした精神分析を行ったのである。その結果、彼

女は自分の潜在意識の中にある思いもよらない願望に気づく。

もしも今夜私が生理中でなかったら、もしも叔父がもうしばらく強要していたら、もしも私がこのように彼の苦しみに思い及んでいたら、私は彼を受け入れていたかも知れない。^{p86}

私は普段絶対に叔父を愛していないとは言えないし、愛していると認めることもできない。でも彼をとて理解し、彼の苦しみに同情するから、こんなことを書いたのだ。彼に愛情を持っているというよりも、彼を哀れに思うから、彼の犠牲になりたいと望んだのだ。^{p86}

精神分析を用いて主人公の心理分析を行うことに集中し成功したという点において、葉靈鳳のフロイト理論の運用が深まったと言えるのではないだろうか。

明朝叔父と顔を合わせた時、どんな態度をとればよいのだろう。明日に思いが及んだ時、麗冰の心に突然恐ろしい考えが浮かぶ。叔父は今頃…。思わずドアに駆け寄って外を見ると叔父の部屋の灯りは既に消え、前方に広がる闇と静寂の中に恐るべき事実が潜んでいるように思われ戦慄する。麗冰の想像は勿論、叔父は自分の行いを恥じて自死しているのではないか、自分が今どうしたらよいか思い悩んでいる明日はあるのか、というものである。こうした描写は、制御することのできないリビドーに従うことで、「これが私である」という自我、「私はこうあるべきである」という超自我から、時に自らの命を引き換えにするほどの自己制裁を受けることがあると示唆するものである。作品のこの結末からは、葉靈鳳の目的が「リビドーの凱歌」を描くことにあったとは考え難い。

3.4 「摩伽的試探」(1928.8.7作) — 「先鋒」作家への転身に向かって

葉靈鳳は1931年に出版された『靈鳳小説集』の「前記」で「摩伽的試探」を自作の中で最も好きな三編の内の一つに挙げている。「摩伽的試探」のプロットは非常にシンプルである。

摩伽は妻が男とふざけ合っているのを見て世俗の事に嫌気がさし、山中の洞穴に籠り、全ての欲念を絶って修行する。魂を鍛錬するために夏の日差しに晒され、冬の氷雪に凍えるが、如何に修行しようと人間の本性を絶つことはでき

ない。ある日老人に連れられて18歳の少女が訪ねて来る。七年の間に枯れ果てたかに思われた摩伽の情欲が復活し、寒いからもっと中へ入れてという少女の誘いともとれる訴えに抗しきれず、摩伽は少女を抱く。行為のさなか、身体に生えた尾を切ってほしいという少女の願いを叶えようとして、摩伽は自傷する。

この作品は主人公の摩伽が仏法を求める修行者として描かれているところから、「曇華庵的春風」の若い尼僧月諦と同じく、禁欲主義の犠牲者の悲惨な結末を描いたものであるとされる。「人の性欲は自然な、抑圧してはならないものであり、世俗を絶ったところで決して内心の正常な欲求は解消されず、人為的に苦心して抑圧しようとするれば、心を捻じ曲げ精神を損なう」ことになる。葉靈鳳は、儒家の禁欲思想が根強く残る20年代にあって、「現代人の現代的な意識を以て全く新しい審美の境地を表現した」³⁰⁾と王劍叢は述べている。宗教者には禁欲が求められ、宗教は神性を以て人間性を迫害するものとなり得るという考え方は、心理分析小説の第一人者であり、フロイト主義の集大成とも言える創作を行った³¹⁾施蟄存の「鳩摩羅什」等の作品にも見られる。しかし、この作品は人間性を捻じ曲げる礼教を攻撃するものである³²⁾と理解するのはどうなのだろうか。また孫乃修は、葉靈鳳は夢の手法と怪異なプロットを用いて、人間の本性や自然な行為に反する禁欲主義を嘲弄し、人間の本性とリビドーには抵抗できないことを肯定している³³⁾と述べているが、そうなのだろうか。

蛇がとぐろを巻くように戸口にうずくまった黒衣の少女は何者なのか。少女が実在しないことは、自傷した摩伽が虚空を抱いているのに気づいたことから明らかである。摩伽は夜半の白日夢を見たのだろうか。フロイト主義の作品として理解すれば、この黒い塊は摩伽のリビドーそのものであろう。彼のリビドーは、彼が七年も修行を重ねながら未だ道が見えないことにため息をついた時、自我と超自我の弱さにつけ込むように蠢き始めた。そして老人から摩伽の悟りの深さを知らない者はいないと褒められて虚栄心が動き、心が大きく乱れた時、自我と超自我の制御を離れた。リビドーの噴出に身を任せた摩伽は、これまでの修行が水の泡になったことを、ではなく、分不相応に仏道を求めたために現世の快樂を逃してきたことを後悔する。しかし最後に摩伽はリビドーの

誘惑を絶つことを望んだ。そうすることが禁欲生活を送りながら欲望に抗しきれない自分を知っていた彼の潜在的な願望であったならば、彼は本当に禁欲主義の犠牲者なのだろうか。異なる見方をすれば、性的願望は所謂普通の男女関係によってのみ満たされるものではないということなのかも知れない。その一例として1931年『小説月報』に発表され、「一種の性欲心理を描くことだけに力を注いだ」³⁴⁾と施蟄存自身が述べる「石秀」を挙げることができる。主人公の石秀は兄貴分揚雄の妻潘巧雲に対する恋着を「愛しているから彼女と同衾したい」から「愛しているから彼女を殺したい」³⁵⁾に変化させていき、ラストシーンにおいて揚雄によって彼女の肢体が切り刻まれていくのを見て愉悅に浸る。「石秀」が性的願望の嗜虐的な充足を描いた作品であるとするならば、「摩伽的試探」は性的願望の被虐的な充足を描いた作品であり、何れも自己愛を表現しているとは言えないだろうか。こうして見ると、摩伽の「試探」は成功したのか失敗したのか、或いは徹底的に失敗したのか判じ難い。

『靈鳳小説集』の「前記」で、自身が最も気に入っている作品とした「鳩緑媚」（1928.3.2作）、「摩伽的試探」、「落雁」（1929.3.24作）の三編について、葉靈鳳は、「この三編は何れも怪異で異常な、非科学的な事柄を題材としている一近頃流行りの歴史或いは旧小説中の人物を用いてリライトされた小説に類する一が、現代的な背景を織り交ぜることによって、それに精神錯綜の効果を生じさせている。これが、私が満足できると感じる点である」³⁶⁾と述べている。「鳩緑媚」は主人公鳩緑媚と家庭教師白靈斯との悲恋が、真っ赤な灯に彩られた戈碧城を背景に語られる異国的な雰囲気になった作品である。「落雁」では上海の恩貝西劇場に『椿姫』の映画を見に来た主人公が、古風な馬車でやって来た女性落雁と親しくなり、父親と住む郊外の家に誘われる。好きな詩の話に興が載るが、実はこの男性は落雁の父親ではなく、落雁を操って若い男性を誘い込む、冥界

た三つの「ク」の要素（「エロティック」、「エキゾティック」、「グロテスク」）を色濃く持つ作品の先駆けであると言えよう。³⁷⁾ 葉靈鳳はその後一年余り短編小説を書かず、1932年の「紫丁香」を以て「先鋒」小説家に転身、新感覚派に接近した。後期作品は筋らしい筋を失い、都会の男女の邂逅や思い通りにならない恋愛を、引用符号のない会話、比喩によるイメージの多用等語りの技巧により拘って書いたものが多い。「摩伽的試探」はその過渡期に書かれた作品であり、葉靈鳳の関心は既にただフロイト理論を運用することから離れ、物の怪に幻惑される古めかしい物語に新しい解釈を与えながら、エロティックでもありグロテスクでもある世界を描こうとした、文学の流行を捉えようとする作家の意欲を示した作品であると考えられるのではないだろうか。

4. おわりに

19世紀から20世紀までの百数十年間に西洋で興った学問や文学の新思潮が続々と中国へ流入し、普及する中、葉靈鳳は1925年に創造社に加入し、30年代末までの十数年間小説を書いた。

葉靈鳳は本稿で検討した何れの作品においても、フロイト理論を運用して登場人物の心の内奥を描写しようとしている。しかし、創作初期には「五四」から続く反封建の気運の中で、フロイト理論を人間の本性を抑圧する封建的性道徳に対する反抗の道具として使い、また夢理論の運用に当たっては、フロイト理論の主な項目を如何に取り入れて書くか、登場人物に自然にその夢を見させるために、如何に「夢の前の配置」を行って書くかに注意している。しかし、彼はそうした時期を経て、彼自身が「数年来、私の小説を批評した文章を少なからず見てきたが、どれも的を射ているとは思えない。ただ忠実な作者だけが、自分の作品をはっきり理解している」と述べた上で、「上手く書けているのは1928年と1929年の間に書いた数編である」³⁸⁾として名前を挙げた作品と同時期に書かれた「明天」では、登場人物の心理分析そのものに集中していき、「摩伽的試探」においては、文学の潮流を捉えようとして新しい試みを行っている。

葉靈鳳のフロイト理論の運用は、創作を重ねることによって成熟し、30年代

を目前にして書かれた作品において、最も深まったと言えるのではないだろうか。そしてフロイト主義と言われる作品の中からも、新しさに敏感な作者の嗜好を見て取ることができると言えるだろう。

注：

- 1) 鈴木晶『フロイトの精神分析』ナツメ社 (2011) p36参照。
- 2) 朱寿桐主編『中国現代主義文学史上巻』江蘇教育出版社 (1998) pp101-102参照。
- 3) 葉靈鳳の創作時期は「性愛小説」と言われる作品を書いた前期と「先鋒」小説に転じた後期の二期、或いはその間に左翼小説を書こうとした時期を設けて三期に分けられる。(陳子善「導言」賈植芳 錢谷融主編『葉靈鳳小説全編上』学林出版社 (1997) pp1-5参照。)
- 4) 本稿で使用したテキストは、賈植芳 錢谷融主編『葉靈鳳小説全編上』学林出版社 (1997) に拠る。引用文の頁番号は本文中に示す。
- 5) 2) に同じ。p210。
- 6) 陳平原『中国小説叙事模式的轉變』(1987) 北京大学出版社 (2010) 第2版 p121参照。
- 7) ジャン-ミシェル・キノドス著/福本修監訳『フロイトを読む』岩崎学術出版社 (2013) p20参照。
- 8) フロイトは欲動を〈心的なものと身体的なものとの境界概念〉と位置づけ、心理学的意識体験としての〈欲求need〉や〈欲望desire〉に比して、生物学的な基盤を考慮した概念として用いる一方、〈本能〉よりは心理的な概念として用いている。(『世界大百科事典29』平凡社 (2011) 改訂新版第5刷p184。)
- 9) 鄭伯奇「『中国新文学大系 小説三集』導言」(1935) 中国社会科学院文学研究所総纂饒鴻競等編『中国文学史資料全編現代巻48創造社資料 (下)』知識産権出版社 (2010) p613参照。
- 10) 郁達夫「『沈淪』自序」(1921)『郁達夫文集第七卷文論』花城出版社 (1983) p149。

- 11) フロイトは欲動を起こさせる力をリビドーと呼び、それは本質的に性的なものであると考えた。(フロイト「精神分析入門」(1900) 高橋義孝 下坂幸三訳『精神分析入門上巻』新潮文庫(1977) p402。)
- 12) 「反抗精神、革命は、どうあろうと全ての芸術の母である。」
「『西廂記』は生命ある人間性が生命なき礼教に打ち勝った凱旋の歌であり記念塔である。」
「礼教は人が作ったものだが、人間性は礼教によって生まれるのではない。礼教は公平に取り扱えば人間性の正統な発展の一助になり得るが、人間性を超越して猛威を振るってはならない。男女が相悦ぶことは人間性の根本である。」
(郭沫若『『西廂記』芸術上の批判与其作者の性格』(1921) 陳思和主編『精神分析狂潮—弗洛伊德在中国』江西高校出版社(2009) p115。)
- 13) 1) に同じ。pp146-159参照。
- 14) 季進「論弗洛伊德の変態心理学説対前期創造社の影響」『中国現代文学研究叢刊』(1987) p181参照。
- 15) 同上p176参照。
- 16) 白采(1897-1926):江西省高安出身の詩人であり、小説家。1923年『創造週報』に代表作「被擯棄者」を発表した。特に異常な性心理の描写に優れた。(馬良春 李福田総主編『中国文学大辞典』天津人民出版社(1991) p1615参照。)
- 17) 9) に同じ。p621。
- 18) 余迅は、魯迅に批判され、反逆者、売国奴のイメージを与えられた葉靈鳳の作品を評価する基準は、題材的に社会性があるかどうかという点にあり、それは80年代以降現在まで変わっていないと述べている。(余迅「葉靈鳳に関するこれまでの評価について」『北海道大学大学院文学研究科研究論集』第14号(2014) p187参照。)
- 19) フロイト「夢について」(1901)『フロイト全集(6)』岩波書店(2009) p648参照。
- 20) 7) に同じ。p40。
- 21) 郭沫若「批評与夢」(1923) 陳思和主編『精神分析狂潮—弗洛伊德在中国』江西高校出版社(2009) p121。

- 22) 日中残渣、昼の名残とも呼ばれる。フロイトは「夢はその材料を、最近の諸印象から一筋の思念の糸が掛け渡されているいかなる時期からも選びとて来ることができる。」とも述べている。(「夢判断」(1900) 高橋義孝訳『夢判断上巻』新潮社文庫(1969) p220。)
- 23) 21) に同じ。p120参照。
- 24) 同上p121。
- 25) 余鳳高「心理学派与中国現代小説」『文学評論』(1985) 第4期pp68-69参照。
- 26) 22) に同じ。p249。
- 27) 7) に同じ。p43参照。
- 28) 武新軍 朱敏「施蛰存与葉靈鳳小説創作之比較」『許昌師專學報』(2000) 第4期p45。
- 29) 11) に同じ。p371参照。
- 30) 王劍叢「対伝統性道德観念的挑戦—論葉靈鳳の小説」(2009) 方寬烈編『葉靈鳳作品評論集』香港文学評論出版社(2011) p172。
- 31) 2) に同じ。p467参照。
- 32) 30) に同じ。p172参照。
- 33) 孫乃修「葉靈鳳与弗洛伊德」『中国比較文学』(1994) 第2期pp99-100参照。
- 34) 施蛰存「『將軍的頭』自序」(1931) 劉凌 劉効礼編『施蛰存全集第一卷 十年創作集』華東師範大学出版社(2008) p623。
- 35) 施蛰存「石秀」(1931) 同上p119。
- 36) 葉靈鳳『靈鳳小説集』「前記」(1931) 現代書局(1934)。
- 37) 1930年代、西洋文学は正に心理分析、内心独白と三つの「ク」が流行していた。つまり、エロティック、エキゾティック、グロテスクである。私も大いに影響を受けて、各種の模造品を書いた。(施蛰存「説説我自己」(1989) 劉凌 劉効礼編『施蛰存全集第二卷 北山散文集第一輯』華東師範大学出版社(2010) p392)。
- 38) 36) に同じ。